

特集 比較研究の地平

シンポジウム／第六七回研究例会「口承文芸モチーフの分布と伝播」

口承文芸モチーフの分布と伝播 はじめに

齋藤 君子

昔話が時代や民族の枠を超えて伝承されてきた物語であることはいまさら言うまでもない。したがって日本の昔話を研究する際にも、対象を日本の話に限定せず、できるだけ広い視野から俯瞰的に眺めて論じる必要がある。しかし現実には言語の壁があり、資料の入手が困難な場合も多いなど、多くの障害が横たわっている。そんな中でも比較研究は着実に進み、近年では昔話の記録や資料のデータベース化、海外の説話の翻訳が進んでいる。個別研究においても情報の蓄積が進み、グローバルな視野に立った比較研究ができる条件は着実に整いつつある。

昔話を分類し、モチーフの分布を調べ、物語が発生した土地を特定しようとする試みはすでにアールネをはじめとする多くの先人たちの時代からあるが、彼らは現在と比べひじょうに限られた資料に依拠せざるをえなかった。しかし、今やそうした状況は克服されつつあり、新たな動向が現れている。そこで今回、精力的に比較研究に取り組まれている三人の研究者たちに御登壇いただき、新たな研究方法と今後の可能性を探るシンポジウムを企画した。

斧原孝守先生はご専門の中国に限定せず、東南アジアから北東アジアまで幅広い資料に目を通し、日本の口承文芸との比較研究

に従事されてきた。「かちかち山」、「猿蟹合戦」、「桃太郎」をはじめとする日本の代表的な昔話の比較研究ですでに大きな成果を上げている研究者である。今回は「東アジアにおける昔話モチーフの分布」と題し、「稲葉の素兎」、「苧環型 蛇婿入り」、及び「ATU二〇の英雄型」について報告していただいた。

ロシアの昔話研究を専門とする直野洋子先生にはユーリー・ペリョースキンの近年の注目すべき仕事について紹介していただいた。ペリョースキンは世界諸民族の神話モチーフの膨大な資料を収集し、データベース化してコンピュータ上に公開するという壮大な挑戦をしている超人的研究者である。彼の研究の特徴は、アフリカで誕生した人類が世界各地に拡散していった足跡を明らかにしてきた人類学、考古学、遺伝学などの成果を口承文芸研究に取り入れ、世界的な広がりをもつ神話的モチーフの伝播経路を人類の移動とその後の文化接触との関係の中で追跡しているところにある。現在、ネット上に公開されているカタログに収められている神話モチーフのテキスト数は年々増加し、確実に充実してきている。今回、直野先生には「人はなぜ死すべきものとなったか」というモチーフを例に取り、ペリョースキンの研究方法について話していただいた。

最後に東北大学の山田仁史先生に「環太平洋の神話」と題してお話いただいた。山田先生は海外の研究者との交流や研究協力も豊富で、すでに「太陽を射たモグラ」、「環太平洋の日本神話」、「大洪水と大火災の神話」など多くの論文があり、世界的視野に立った比較研究で知られている。